

# 巻 頭 言

多根第二病院 院長 安部 嘉男

大阪で今日、2021年に並ぶ観測史上最も早い記録での桜開花発表がありました。2021年といえば、多根第二病院と多根介護老人保健施設てんぼ一ざんで、COVID-19の第4波（2回）の洗礼を受けた年です。以後、2022年、第6波（4回）、第7波（4回）、2023年第8波（2回）と、計12回のクラスター発生を経験してきました。しかし、今度こそいよいよ春の到来を告げる象徴となるのか。いやなるでしょう。ならなくてはならない。春はもうそこまで来ています。マルカム曰く、「The night is long that never finds the day」明けない夜はないを信じて、互いに手を取り合って頑張っていきましょう。これからは多種多様な場面で新型コロナウイルス感染症2019で長く閉ざされていた対面交流が、本格的に活性化されていくことを心から願っています。

さて、第12巻となる多根総合病院医学雑誌ですが、今回も、多職種多方面の皆様から、14編もの論文を頂戴しました。多くは症例報告でしたが、辛い日々の中でのご尽力、自己研鑽には本当に頭が下がり感謝申し上げます。

論文を書くことについては、すでに先輩諸氏が述べられているように、話すだけでなく書いてみれば、違った気付きに遭遇することができます。「あれ、おかしいな、ここはどうなっているのだろうか？」などと自問自答しながら、足りないピースを見つけに筆をおいて大海原に出かけなければなりません。この大変な作業がなければよい論文は完成できません。完成したときには、ご自身の視点、視野の成長、論理的構成力、説得力の向上にきっと驚かれることでしょう。また、原著は、「original article」と呼ばれるように独自性、発展性、得られた知見に基づく実践への示唆に富むことが求められるものなのでより高級となりますが、より社会的価値は高く、査読者に受理されたときの喜びはひとしおです。

道<sup>い</sup>を休<sup>やす</sup>めよ 他郷<sup>くしん</sup>苦辛多しと  
 同袍<sup>どうぼう</sup> 友有<sup>ゆうあり</sup>り 自<sup>おのず</sup>から相親<sup>あいした</sup>しむ  
 柴扉<sup>さいひ</sup> 暁<sup>あかつき</sup>に出<sup>い</sup>づれば霜雪<sup>しもゆき</sup>の如し  
 君<sup>きみ</sup>は川流<sup>せんりゅう</sup>を汲<sup>く</sup>め 我<sup>われ</sup>は薪<sup>たきぎ</sup>を拾<sup>ひろ</sup>わん

故郷を離れて苦勞が多いなんて、そんなこと言うな。ここには志を同じくする仲間がいる。助け合いの楽しみも自然と生まれてくる。夜明けに柴の戸を押して外に出ると、霜が雪のように積もっている。君は川の水を汲んできてくれ。僕は薪を拾ってくるから。

これは21年前、大阪府立病院（現、大阪急性期・総合医療センター 高度救命救急センター）を去る際に、恩師の桂田菊嗣先生よりいただいた、広瀬淡窓の「桂林荘雜詠示諸生」という漢

詩です。

昨今、TOP1%の論文数が減少し国際的共著力も年々低くなってきていると揶揄されている日本ですが、多根は多くの根と書きます。医学界ではまれにみる垣根のない素晴らしい一個集団です。ぜひ皆様の互いの力を結集して原著にも再挑戦し、明日の多根をより素晴らしい世界にしていっていただければと心に願っています。

令和5年3月19日 記